

第Ⅲ章 調査の成果

調査面積が限られていた上、出土遺物も多くなかったため、考察の範囲も限られる。

今回の調査では中世・近世の遺物が出土した。中世は、土師器皿の小片が2点出土したのみである。佐土原城の築城は中世に遡り、今後報告書が刊行される6次調査でも中世の遺物・遺構は確認されていることから、調査地も中世に屋敷地が存在した可能性はあるものの、具体的にそれを示す遺構は確認できなかった。

近世は比較的多くの遺物・遺構が確認された。遺構のうち掘立柱建物は5棟に及ぶ。柱穴出土の遺物が少ないために年代は不明だが、掘立柱建物1・3・4、掘立柱建物2・3は重複することから、掘立柱建物の時期は複数にわたると考えられる。このうち掘立柱建物1の分布する場所は土坑が疎らである。これは、長期間使用されたためであろう。

土坑は調査区中央部に密集する傾向が認められた。浅く、小規模な土坑が切り合う点や、埋土における炭の出土などから、土坑の多くはごみ穴と考えられる。限られた敷地においてごみ穴が多数作られた点を考慮すると、調査区中央部は庭であった可能性が高い。土坑内出土遺物は、同じ土坑でも複数の時期の陶磁器が混在することが多く、埋没の年代が特定できるものは極めて少ない。これは、庭で繰り返しごみ穴が掘られては埋められた結果と考えられる。

出土遺物に目を転じると、陶器・磁器共に肥前産が主体を占めており、関西、瀬戸美濃産はごく少数である。薩摩焼は、高岡麓遺跡では大甕や土瓶などの陶器類の殆どを占めていたが、本調査における薩摩焼は陶器類の中でも決して多いとは言えず、日常用具の流通における宗藩の影響はさほど強くなかったと考えられる。一方、白薩摩も皆無であったが、付近の佐土原城跡第6次調査では一定量出土している。白薩摩が贈答用陶磁器としての性格を備えていたことを考えると、本調査で皆無だった背景には身分が関係したと考えられる。

佐土原には、安政年間作成と伝えられる城下絵図が残されている。現在の地図と照合すると、佐土原城の北側は佐土原藩に仕えた武家屋敷の名が記されており、調査地付近には「池田」、南は「島見幸之助」の名を見ることができる（外に「内侍」とあるが、詳細は不明である）。なお、幕末作成と推定される「追手・鳴之口・野久尾・十文字諸士分限帳」には「池田舟外」「嶋見勘右衛門」の名前が残されている。分限帳にある姓はどちらも一軒のみであり、幕末の段階で両家が調査区内に存在した可能性は高いと考えられる。二家とも三十五石扶持であり、中小姓を務めていたとあるものの、出自やその後の詳細は不明である。このように、佐土原藩に残された文献は限られていることから、今後も継続的な発掘調査を行い、成果を積むことが必要であろう。

参考文献

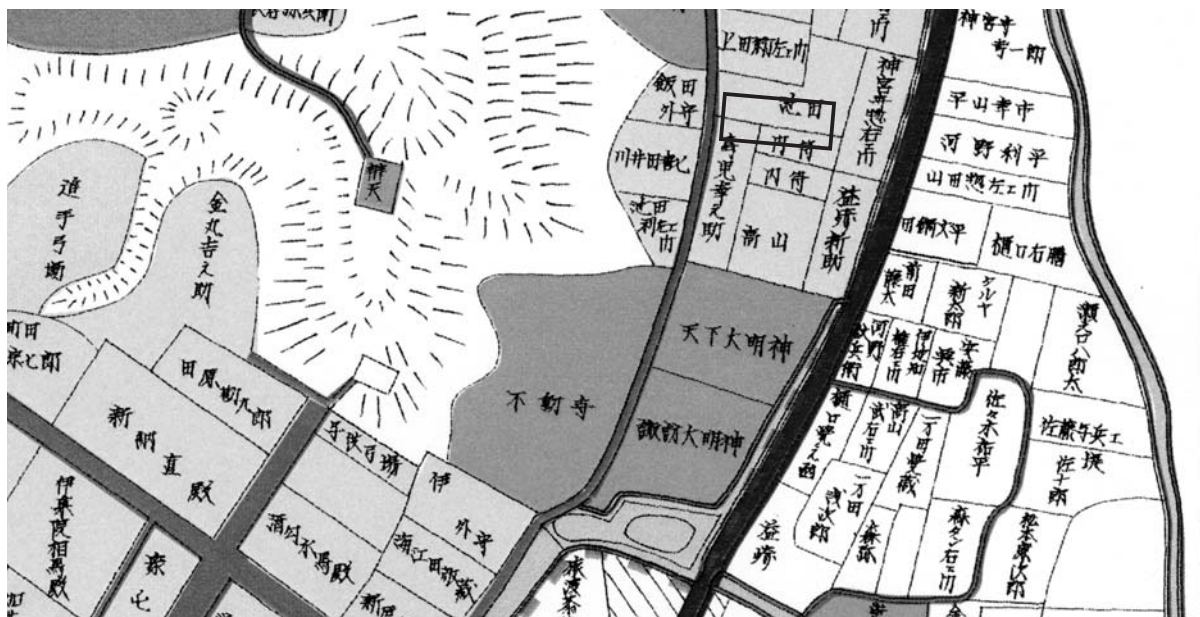
宮崎県 1997「宮崎県史 史料編 近世6」

宮崎市 2007「史跡佐土原城跡保存管理計画書」

宮崎市教育委員会 2012「高岡麓28・31・32地点」宮崎市文化財調査報告書第90集



第16図 佐土原城下絵図（伝安政年間作図）における調査区推定位置（黒破線）
※「史跡佐土原城跡保存管理計画書」より引用



第17図 佐土原城下絵図（伝安政年間作図）における調査区推定位置図（黒枠）
※「史跡佐土原城跡保存管理計画書」より引用